

## ユニバーサルデザインに基づく小学校外国語科授業実践

奥宮智子<sup>1)</sup>，是永かな子<sup>2)</sup>

1)高知県内公立小学校

2) 高知大学大学院総合自然科学研究科教職実践高度化専攻・高知ギルバーク発達神経精神医学センター

## Foreign Language Class Practice Based on Universal Design at Elementary School

Tomoko Okumiya<sup>1)</sup>, Kanako Korenaga<sup>2)</sup>

1) Public Elementary School in Kochi Prefecture

2) Kochi University Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Professional Schools for Teacher Education, Kochi Gillberg Neuropsychiatry Centre

## 要 約

本研究では、高知県の5つの柱を意識した授業のユニバーサルデザインに焦点をあて、外国語における友だちとの関わり、コミュニケーションの楽しさを体験する外国語の授業づくりの実践研究を行った。具体的には小学校第5学年外国語に注目して全員が参加するための手立てを具体化した。介入前評価の実態を考慮した手立てを考案し、授業実践を行った。結果は以下である。第一に実態把握では自分から友だちと関わりにくく、外国語活動等の言語活動を伴う活動となると配慮を必要とする児童がいた。よって教材・教具の工夫において、友だちと関わる必然性を持たせたワークシートを作成した。関わる必然性を仕組むことで、自分から友だちと関わるのが苦手な児童も、英語を使ってやり取りする相手を求めて関わる行動が増えた。これは、Q-Uの1回目より2回目の学級生活満足群に属する児童が10%増加したことにも示されている。またSDQに見られた多動不注意、情緒、向社会性のポスト評価でもLow needsの割合が増加した。よって、友だち同士のつながりを強化していくことが仲間意識の向上へとつながったと考察した。学級内で友だちとつながることができれば、より言語活動の質が向上し、コミュニケーション活動が活発に行われることであろう。第二に、活動内容の工夫としてペア・グループ学習に変化をもたせた。具体的には、何分間で何人と関わるという見通しを提示した活動を仕組んだ。また、Small Talkにて、授業者対ALT、JTEだけではなく、児童も巻き込み、全員で参加できる授業を意識したことによる、具体的なやりとりの活動を設定し、興味関心をもたせる場面設定を行った。その場面設定は、単元ゴールに向けてどのような英語表現が使えないといけないのかを常に意識させ、児童に身近にある状況をもとに、もっとやりたい、英語を話したいと思わせることが重要であった。第三に、情報伝達の工夫による具体的な場面状況において、視覚提示を行った。結果として外国語意識調査では、「英語の授業の内容を理解していると思う」と回答をした児童の割合は100%となった。教材教具の工夫や活動内容の工夫において全員参加型の授業を追求したことから、内容理解につながったと考える。

キーワード：ユニバーサルデザイン，小学校，外国語

## 1. 問題と目的

2020年度より新学習指導要領が本格的に実施され、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善が求められている。学習指導要領解説総則編においては、「児童の発達の支援」の項目に、児童の発達を支える指導の充実とし

て、学級経営の充実を図るうえで最も重要なことは学級の児童一人一人の実態を把握すること、すなわち確かな児童理解であるとしている<sup>1)</sup>。特別な配慮を必要とする児童への指導については、障害のある児童などの困難さに対する指導上の工夫の意図を理解し、個に応じた様々な

手立てを検討し、指導に当たっていく必要がある<sup>2</sup>。このような背景の中、通常の学級においては、発達障害のある児童をはじめ、様々な困難を抱えている児童が在籍している。児童の実態把握をもとに、つまずきの課題を克服し、全員参加の授業が求められていると考える。学級全体の児童が参加するための手立てとして、近年ユニバーサルデザインに基づく授業づくりが注目されている。高知県教育委員会は、「すべての子どもが『分かる』『できる』授業づくりガイドブック～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもに有効な支援～」を公表し、具体的にⅠ環境の工夫、Ⅱ情報伝達の工夫、Ⅲ活動内容の工夫、Ⅳ教材・教具の工夫、Ⅴ評価の工夫の5つが「分かる」「できる」につながるとしている<sup>3</sup>。外国語科においても、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践を行うことで、学習理解につながると同時に、全員参加の授業実現に寄与するであろう。

さて、外国語科実施にあたり、中学年での外国語活動を通して、また高学年から発達の段階に応じて、段階的に文字を読むこと・書くことと合わせて教科学習が導入された。直山は、言語活動を中核に据え、どの子どもも参加する授業を展開することが大切であり、子どもにとって「必然性」のある具体的な課題が設定されることで、その課題解決に向けて意欲的に活動が行われると述べている<sup>4</sup>。齊藤・高知県教育委員会は、見方・考え方を基盤に学びの系統を据え、単位時間の授業改善という視点を超えて、単元開発の研究に向かうことが重要であると指摘している<sup>5</sup>。単元を創る観点からも、授業のユニバーサルデザインによって、外国語による見方・考え方を働かせた言語活動となれば、児童が意欲的に活動し、全員参加の授業につながるであろう。

以上を踏まえて本研究では、高知県の5つの柱を意識した授業のユニバーサルデザインに焦点をあて、外国語における友だちとの関わり、コミュニケーションの楽しさを体験する外国語の授業づくりの実践研究を行う。そのことを通じて、全員が参加するための手立てを具体化するとともに、学習意欲の向上について検討する。

## 2. 方法

### 2.1 実践対象

本研究では、小学校第5学年外国語に注目して、授業のユニバーサルデザインの実践研究を行う。実践研究の対象は、M小学校5年生20名(男子8名、女子12名)とした。

### 2.2 M小学校授業スタイル

新学習指導要領実施にあたり、『NEW HORIZON Elementary English Course 5』の教科書を活用した授業実践を行う。そこで、M小学校の前年度までの授業スタイルを応用した授業実践を実施することとする。M小学校授業スタイルとは、単元ゴールの明確化(コミュニケーション活動の工夫)、主体的・協働的に取り組める活動の設定、授業スタンダード(M小スタイル・新M小スタイル「Do-Learn-Do Again」)がある。具体的には、①Greeting、②Warm up、③Activity1、④Activity2、⑤Reflection、⑥Greetingである。2時間に1回は、Warm upの後にSmall talkを行う。M小スタイルが定着してくると、③は、Do-Learn-Do Againとしての新M小スタイルを取る。これは、Do-Learnでまずは児童同士がコミュニケーション活動を行い、教師による中間評価にて引き出したい表現やもっと使わせたい表現等の確認を行う。それを受け、Do Againで会話のレベルアップを図る。中学年から高学年にかけては、相手意識をもたせるために「Eye contact, Clear voice, Gesture, Smile」等の相手意識に目を向けさせる。それを踏まえ高学年では、より質の高い表現につながるよう、3つのキーワード「Authenticity(真理性)、Personalization(個人化)、Creativity(創造性)」を上乗せした単元づくりを行う。従来のM小スタンダードを、さらに3つのキーワードを意識することで、より質の高い言語活動ができるよう授業づくりを行う。これらのスタンダードを踏まえ、対象学級にてユニバーサルデザインに基づく授業づくりを行っていく。

### 2.3 授業のユニバーサルデザインの導入

外国語科の授業におけるユニバーサルデザインの5つの視点についての支援方法を表1に示す。実践対象学級では、具体的に、外国語科による教科でつけるべき力を踏まえつつ、第一に教材・教具の工夫である全員が「できる」につながり、達成感を味わうことのできるワークシートの作成及び板書の工夫を行う。

第二に活動内容の工夫による、ペア・グループ活動の形態を工夫する。様々な友だちと関わり、より主体的に活動できる活動を仕組む。第三に情報伝達の工夫により、学習している内容を分かりやすくするために、視覚的な掲示物を活用する。このように本研究では、M小授業スタンダードをもとに、授業に参加と理解を促す授業のユニバーサルデザインの手立てを具体化しつつ、友だちと関わり、主体的に外国語を使おうとする言語活動の充実を目指した授業づくりについて検討することとした。

表1 ユニバーサルデザインに基づく支援方法

授業のユニバーサルデザイン	支援策
環境の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1時間の授業の流れを視覚的に提示する。</li> <li>・リフレクションの時間設定を授業の初めに示し、見通しをもたせる。</li> <li>・板書の構造化を行う。</li> </ul>
情報伝達の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのように英語表現を使えばよいのか理解できるように、英語表現とイラストを組み合わせた提示を行う。</li> <li>・今何をするべきか分かるように、活動と活動の間に伝わりやすい指示の工夫を行う。</li> </ul>
活動内容の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童同士がつながるよう、関わる必然性をもたせた活動の工夫をする。</li> <li>・相手意識をもたせた単元ゴールの設定をし、児童同士をつなぐようにする。</li> <li>・活動の初めに時間設定を示し、より多くの友だちと関わる場面設定を行う。</li> <li>・Do-learn-Do againで更に使える英語表現を増やす。</li> </ul>
教材・教具の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関わる必然性のあるワークシートの作成を行う。</li> <li>・タイマーやタイムタイマーを活用し、時間内に〇人とやり取りができる工夫をする。</li> <li>・ICTの活用を図る。</li> <li>・児童に習得させたい英語表現を、必要に応じてすぐに提示できるように、単語のイラストカードをあらかじめ準備しておく。</li> </ul>
評価の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リフレクションシートを作成し、花丸やハンコ等の評価を行う。</li> <li>・適切な聞き方や、学習意欲が見られた時には、褒める。</li> <li>・使いたい英語表現への質問や、使えた英語表現があると、その場ですぐに褒める。</li> </ul>

## 2.4 倫理的配慮

本研究にあたって、当該校の学校長を始め、教職員及び実践対象の保護者に、書面にて研究の目的と個人情報の管理、個人が特定されない形での研究結果の公表について承諾を得た。

## 3. 結果

### 3.1 授業実践前の対象児童の実態

学級人数は20名と比較的少なく、全体的に学習意欲は高い。また、学力の高低差も顕著には見られておらず、落ち着いて学習に取り組むことができる。Q-Uの満足群に属する児童は75%と高い傾向にある。SDQ(Strengths and Difficulties Questionnaire)(児童版)<sup>6</sup>では、全体的にLow needsが多く、行為面では、良い傾向にある。しかし、多動不注意については、3名High needsに属している。授業中立ち歩くことはないが、姿勢が崩れがちで、指示が聞き取れないこともある。

外国語活動においては、中学年の時からの年間35時間行っており、基本的なコミュニケーションの素地を養ってきた。そのため、児童の多くは、外国語を使って伝え合うことや、聞くことを体験的に活動することで慣れ親しみ、相手意識をもって伝えることにも取り組んできた。年度当初の課題としては、人前で発表することや反応を示すこと、自分から友達と関わりにくく、言語活動を行う際には配慮を必要とする児童がいた。そのため、クラス全体としてのつながりの弱さは見られる。20XX年5月の外国語意識調査によると、「英語の授業の内容を理

解していると思う」95%、「英語の授業は楽しい」と「英語の授業に進んで参加している」75%、「外国語で友達や先生と会話することが楽しい」60%、「英語で自分のことや意見を発表することが楽しい」55%という結果であった。この調査結果から、外国語に対する理解や意欲は肯定的評価ではあるが、英語を使って伝える自己表現する活動に自信のなさや、苦手意識をもっていると考察した。他教科においても、相手を意識した伝え方に課題がある。

### 3.2 実践導入前の「単元計画作成協議」の実施

1学期の実態把握をもとに、同学年教員と英語指導教員との定期的な教材研究会を実施した。協議内容は、全員が参加できるように、活動に楽しみをもたせる工夫等についてである。そのために、学級全体及び個別支援の充実の手立てを取り入れたユニバーサルデザインの5つの視点を踏まえた活動を取り入れることとした。協議の際、単元全体の検討を行うため、まず単元ゴールの設定、次にゴールに向けた1時間ごとの単元構成を詳細に協議していく。実施期間は、20XX年8月25日～11月25日の期間、教科書を活用したUnit4～Unit6の授業実践を行うこととなった。

#### 3.2.1 Unit4 He can bake bread well. (全8時間)

本単元では、単元ゴールを「(自分の良さに気付くために)友だちの良いところ紹介カードを作ろう」とした。身近な人を紹介することができるという学習課題から、「can」と「can't」の使い方、「Can you～?」と尋ねる言い方が使えるようになることを目標に学習していく。

そこで相手意識をもたせるために、友だちの良さを紹介するとともに友だちから自分の良いところを聞いて自分の良さにも気付くことにも目を向けさせる単元ゴールの設定を行った。授業スタイルである Greeting と Warm up は毎時間取り入れることとする。以下が全 8 時間の実践内容である。

第 1 時は、まず本単元のゴールのイメージをつかませるため、Small talk で「I can play～」 「I can't play～」 「How about you? 」と尋ね、児童に質問をしていく。Activity1 では、動詞カードを使って「I can ○○。」の言い方に慣れさせていく。Activity2 では、自分のできることを紹介し合い、ペアでやり取りをさせていく。

第 2 時は、Activity1 で「Can you ○○? 」と尋ねる言い方を確認する。Activity2 では、友だちと質問し合う。その際、個別支援として、関わる必然性のあるプリント(資料 1)を作成し、5 分間で 10 人に尋ねる課題を出す。課題は、友だちに質問していき、ペアになった友だちが「Yes I can. 」と答えるまで何ができるのか尋ね、ワークシートに記入していく。

第 3 時は、Small Talk で PPT を使い、誰がどんなことをできるのか画像を見せることにした。その際、その人ができることを見つける。徐々に、「He can ○○。」 「She can ○○。」の表現に気付かせる。ICT の活用を図り、視覚支援の手立てを取り入れる。

第 4 時は、Do-Learn-Do Again を入れた授業スタイルを取る。その際、中間評価を受けて、さらに on, by, in, under などの言語材料を増やした学習課題にステップアップしていく。第 2 時よりも使える英語表現を増やすため、関わる必然性のあるワークシートをレベルアップしたものを作成(資料 2)した。関わる相手は、第 2 時で関わった人とは違う相手を 5 人見つけること、さらに単元ゴールのペアの相手を確定し、ペアの相手ができることを 5 つは探すという課題を与えてコミュニケーション活動に取り組んだ。

第 5 時～第 7 時は、友だちの良いところ紹介カードを作成し、友だちの良いところを発表する練習をしていく。その際、授業の終わりの 5 分前にアルファベットの大きな文字を書くことの指導を取り入れる。

第 8 時の Final goal では、学年合同で友だちの「良いところ紹介カード」を発表する。伝える相手の条件として、必ずペア 2 人で行うこと、伝え終わったら相手にサインをもらうこと、10 分間で 5 人に紹介を行うこととした。

まず Do でやってみる。中間評価 Learn を受け、「Very well」等の表現や、相手意識をもち、紹介する等の中間

評価の後、Do Again で相手のサインをもらった 1 人目の相手とペアになり、最終確認を行う。終末には、紹介カード(資料 3)を作成したペアと紹介し合う。

資料 1 関わる必然性のあるワークシート

Unit4 He can bake bread well. 第 2 時/8 時間中

Class( ) name( )

Let's Try: 友だちにインタビューをして分かったことをメモしよう。

自分 name → 友だち name

相手がいるよね!

友だちの名	友だちができること

資料 2 関わる必然性のあるワークシート

Unit4 He can bake bread well. 第 4 時/8 時間中

Class( ) name( )

Do-Learn-Do Again: 友だちにインタビューをして分かったことをメモしよう。

自分 Name: → 紹介する友だち Name:

自分から相手に聞くよ

友だちの名	友だちができること・得意なこと

紹介する友だち name

友だちの良いところがたくさん見つかったよね!! とても良い紹介カードが作れそうです☆



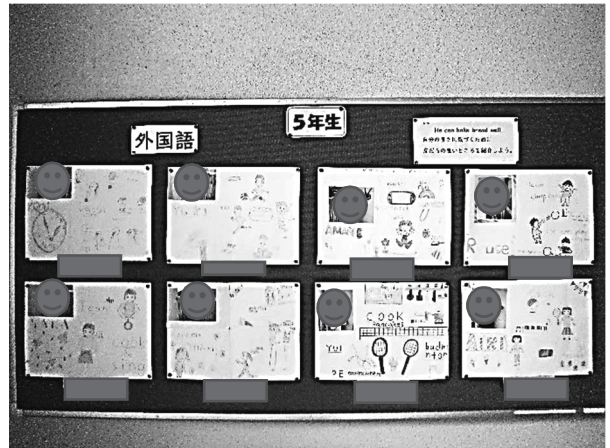
### 3.2.2 Unit4 He can bake bread well. の結果

本単元では、友だちの良さを見つけ、友だちからは自分の良いところを紹介してもらう活動を通して、自分の良さに気付くことをねらいとして単元ゴールを設定した。活動で効果的であったのは、第2時と第4時での児童の活動のねらいとして、相手意識をもって関わる必然性をもたせることであった。コミュニケーション活動が終わると、相手にサインをもらうことを課題とした。教師側が時間内に何人と指定することで、伝えることが苦手な児童も達成感があったと見とった(資料3)。また、毎日日記の中には、楽しめたという感想(資料4)も得られた。友だちのできることを紹介するカードを作成した際、できることを描いたイラストだけではなく、単語を書く活動も取り入れた(資料5)。課題は、アルファベットを聞いて書くことであった。単元導入時によるインプットを中心に活動を仕組んで、書きにつなげることが課題として指摘された。聞く・話すができても、書くことへの課題が見られることから、ALTとの連携を密に取りながら、聞くことに慣れさせていくことも視野に検討していく。

資料3 ワークシートの記入

資料4 毎日日記の振り返り

資料5 友だちの良いところ紹介カード



### 3.2.3 Unit5 Where is the post office? (全8時間)

本単元では、8時間設定のうち、2つの単元ゴールを考え、4時間ずつの設定にした。M小授業スタイルは維持しつつ、前単元と同様に行い、課題を改善する手立てとより質の高い言語表現ができるための授業実践を行った。

前半1つ目の単元ゴールは、自分達の町を見直すために「私たちの町夢タウンを紹介しよう」と設定した。第1時では、前半の単元ゴールに向かうために単元計画を児童と一緒に作る作業を行った(資料6)。

資料6 第4時までの単元計画

Unit 4	Where is the post office ?
ゴール	道案内しながら宝さがしゲームをしよう!
①	場所の言い方と道案内の仕方に慣れよう
②	オリジナルタウンマップを作ろう。
③	夢タウンの紹介に向けて発表の練習をしよう。
④	わたしたちの町「夢タウン」を紹介しよう。

まず、Small Talk(資料7)で「Where is the post office?」等と尋ね、第4時のゴールを示す。

資料7 単元ゴールを示す Small Talk の内容

T1: Excuse me.
T2: Yes?
T1: Where is the ○○ ?
T2: Go straight for two blocks. . . .
T1: Where is the ○○ ?
T2: Go straight. Turn right. . . .

その際、自分達の住むマップを使用し、道案内の様子

のやり取りを見せる。そのためにはどのような学習をしないといけないのかについて児童と一緒に単元計画を立てる。必然的に道案内をするには、場所の言い方と道案内の仕方を学習しないといけないことに気付かせる。

第2時では、Small Talkで地図上のルートをたどり、道案内ができるためにオリジナルマップ(夢タウン)をつくることを確認する。既習事項の「Go straight」「Turn right」「Turn left」の言語表現を確認しながら、道案内の仕方に慣れさせていく。マップをつくることができれば、実際にペアで尋ね合う。その際、より意欲的に活動ができるための手立てとして、自分のつくったオリジナルマップに何を描いたのか付箋に2つ書き出し、ペアでクイズを出し合う。例えば、AがBの付箋に書いたリストを見て、「Where is the post office?」と尋ね、Bが「Go straight」等と伝えて道案内をスタートさせる。その際、Aは自分の地図を見て、Bが言っている道案内に従ってルートをたどる。最後に、Bの場所にAがたどり着いたのか確認する。

第3時では、Warm upで「Go straight ゲーム」を取り入れる。身体を動かした簡単なゲームである。「Go straight」と言われれば進む。「Turn right」と言われれば右に曲がる。その際、スピードの変化を持たせる。次に、前時でオリジナルマップをつくったことから見えてきた課題を確認するとともに、英語を使う時の困り感は何かを出させる。さらに、言語表現をより質の高いものにするために、オリジナルマップの中にある付箋に書き出したリストを2つから5つに増やす。中間評価(Learn)で児童からの困り感を引き出し、確実に使えることを目指す。Do Againでは、Doでやり取りした英語表現がさらに質の高いものにするために、再度同じペアでやり取りをさせる。その後はペアを変えてやり取りをする。

第4時では、5年合同で「わたしたちの町夢タウンを紹介しよう」と設定し、色々な友だちと関わりをもたせる。Small Talk(資料8)では、やり方を説明し、5分間で2人とやり取りをすることを確認する。

資料8 夢タウンの紹介方法である Small Talk の内容

T1: Hello. I' m○○.
T2: Hello. I' m○○.
T1: This is original town. This is zoo and library・・・.
T2: Where is the zoo?
T1: Go straight for two blocks.・・・
T2: Ok. Thank you.

終われば前単位と同様に相手にサインをもらう。中間評価(Learn)で確実に英語表現を身に付けることができるように、「Go straight for two blocks」で「for」を入れるように確認する。Do againでは、10分間で5人と交流する課題を示す。前時と同様に最初にやり取りをした友だちと再度伝え合う。

第5時では、実際に道案内をする活動に入っていく。「It' s in the desk」「It' s on the desk」,「It' s by the desk」「It' s under the desk」と伝えられるようにする。まず、Small TalkでFinal goalを示す。その際、T1とALTの宝物を探すために道案内していくところまでを示し、道案内は児童にさせてみる。そうすることによって箱の中や机の中にある宝物は「on」や「in」などの表現が使えないと案内できないことに気付かせる。

第6時と第7時では、宝物のありかを決めて道案内の仕方を練習する。前時に、児童から宝探しには、地図が必要だという意見が出たことから、校舎内の地図を持たせることにした。地図は、宝物を隠した教室にマークをする等して宝物がある教室はどこなのかを示す。次に、ペアで「Where is the treasure?」と投げかけ、相手が道案内するのである。これらのやり取りを Do-Learn-Do againを通して、相手意識の向上を目指し取り入れていく。

第8時では、Final goalである「道案内しながら宝探しゲーム」をする。ペアでやり取りしながら宝のありかを見つける活動を行う。さらに終末には、世界にも目を向け、地図や標識についても触れる。

単元全体を通して、Unit4の課題であったアルファベットを聞いて書くことができるために、「モール」を使ってアルファベットを作っていく活動を行う。村上は、小学校で身につけたい英語の音韻認識において、多感覚(視覚・聴覚・触覚・運動感覚など)を用いた指導で、工作用のモールを使って、立体的にアルファベットをつくるのが効果的であると指摘している<sup>7)</sup>。これは、Unit5以降も取り入れていくこととする。

### 3.2.4 Unit5「Where is the post office?」の結果

本単元の第1段階のねらいは、オリジナルタウンをつくることで、自分達の町を見つめるとともに、外国人観光客に英語を使って道案内ができるようにするためであった。第2段階のねらいは、宝探しゲームをすることで、道案内の言い方に慣れさせ、英語で話す表現を理解させていくことであった。

単元導入時には、児童と一緒に単元計画をつくることで見通しをもたせた活動となるように、段階をおって使

える英語表現を身に付けさせることがねらいとした(写真 1)。文字だけではなく、イラストを表示することで、確認しやすい手立てを取った。また、進んで道案内をすることができるように、本単元の第 1 段階の単元ゴール「夢タウンの紹介」に向けて、自分達の町のマップにこんなものがあつたらいいな、と思える物を描いていった。

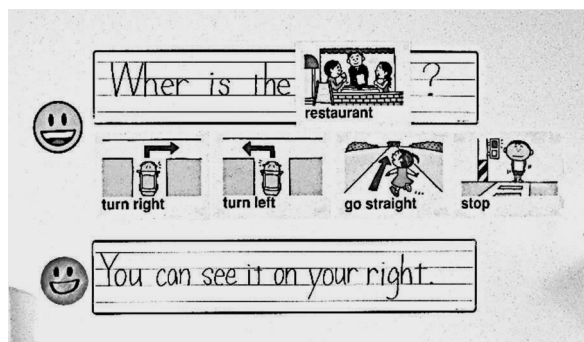


写真 1 道案内する英語表現の習得

将来自分達の町にできるかもしれない物を作成すると、ペアで道案内をしながらどんなものをどんな所につくったのか想像させることで、学習意欲を引き出す手立てを取り入れた(写真 2)。



写真 2 オリジナルタウンを紹介している様子

オリジナルの夢タウンが完成すると、友だちに自分のつくった町を紹介するという場面設定を行った。友だちの夢タウンについて、「Where is the movie?」等と尋ね、尋ねた人が自分のマップを見ながら道案内された通りに自分の顔を描いた磁石を使って進み、友だちの作った夢タウンの場所を当てる活動の設定をすることで、話す必然性をもたせた活動となるようにした。マイ磁石を使うことで、道案内された方向性を確認しやすくする活動内容の工夫を取り入れた。第 2 段階の単元ゴールの「宝探

しゲーム」での道案内では、繰り返し活動を取り入れることで、「Where is the treasure?」と「You can see it on your ○○.」と自然と使えるようになった。単元後半に、ALT によるパフォーマンステストを行い、どこまで道案内ができるのか見取ったところ、①Go straight. You can see it on your ○○. ②It's under/by/on/in the ○○. の①②の表現がどちらも使える A 評価は、40%、①か②のどちらかが使える B 評価は 40%、①②両方使えない C 評価は 20%であった。この結果から、①の表現はできつつあるが、②の前置詞を使った言い方が不十分であったと考察した。これは、マップを使った紙面上でのやり取りはできるようになりつつあったが、前置詞を使った表現が使えることの課題が指摘された。

### 3.2.5 Unit6 What would you like? (全 8 時間)

本単元では、単元ゴールを ALT の家族に自分達の町のふるさとメニューを紹介するために、「ふるさとメニューをつくろう」と設定した。

第 1 時では、Small Talk に本単元のゴールイメージをつかませることができるように、どんな食べ物が好きか、どのようなふるさとの食べ物があるのか出し合う。その後、ふるさとのメニューをイメージするために、PPT で児童とどんな食べ物があるのか確認し、見通しをもって活動できるよう単元計画の作成を行う。ここでは、食べ物の言い方を知ることから入る。

第 2 時では、「What do you want?」と「What would you like?」の違いに気づかせる。ALT と英語指導教員と連携した Small Talk(資料 9)で、より具体的な場面を設定したやり取りを行う。

#### 資料 9 Small Talk の内容

- |  |
|--|
| <p>①What do you want?<br/>「次、何が違うか聞き取ってね。」</p> <p>②What would you like? (お店の場面)<br/>I'd like French fries and hamburger and soda.<br/>試食シーンを実演する。</p> <p>③How much is it?<br/>④950Yen.</p> |
|--|

第 3・4 時では、丁寧な言い方をお店で使えるようにするために、注文の仕方と答え方、「How much is it?」と「○○yen.」の表現が使えるようにするとともに、ふるさとメニューを考えていく活動を行う。教材・教具の工夫としては、相手意識をもたせた友だち同士のつながりをもたせるために関わる必然性をつくる(資料 10)。



第5時では、ふるさとメニューを絵に描いたものをお店で注文する活動を設定する。お店屋さんとお客さん側に分かれて活動することで、「What would you like?」「I'd like○○.」と「How much is it?」「○○yen.」の表現に慣れさせていく。

第6・7時では、ALTの家族に向けてふるさとメニューを紹介するために、ビデオレター作成に向けての計画を立てる。どのような紹介にするのか話し合った後は、グループに分かれてリハーサルを行う。その際、前時までに「I'd like ○○.」の表現に慣れさせておくとともに、紹介するとなれば、どのように紹介すれば伝わるのか相手意識をもたせた活動になるようにしていく。

第8時では、実際にふるさとメニューのビデオレターを作成する活動を行う。より相手に伝わるためにはどのように話せばよいのか、中間評価で確認しながら確実に紹介できるようにしていく。

資料10 第3・4時で用いた教材

Unit6 What would you like? (全8時間)

Let's Try2・3 Picture Dictionary から、食べたい料理を決めて、友だちとペアで注文したり注文を受けたりしよう。

What would you like? I'd like Okonomiyaki.

How much is this? It's 250 yen.

①自分が注文したいメニューを決めよう。★1000円以内ランチです★

注文したいメニュー	Price (ねだん)

②ペアで注文されたメニューとその代金を伝えよう。

name	注文されたメニュー	Price
例 Aさん	お好み焼き	340yen

### 3.2.6 Unit6 What would you like? (全8時間) の結果

本単元を通して、ALTの家族が自分達の住む町に来た際、ふるさとメニューを食べてもらいたい、という思いから単元ゴールを設定していった。それが、将来実現可能となるかもしれない。そうなれば、外国語を使って、「What would you like?」と尋ねた際、答え方「I'd like ○○.」と聞き取れるようにしておくことは必要である。本単元を通して、ALTの家族に向けてビデオレターを送ることに向けて、ふるさとメニューを紹介するという場

面設定を行ったことから、主体的に外国語を使ってやり取りする姿が見られた。しかし、5月にとった外国語意識調査の実態から、「英語を使って、日本の文化を紹介してみたいと思う」の項目において、10月に同様の調査を行ったところ、「あてはまる」と回答した児童の割合は60%に留まった。このことから、未だ発表することへの課題が挙げられる。今後、継続して発表に慣れさせていくこと、自信をもって発表ができる効果的な指導の必要性があると課題として指摘された。

### 3.3 SDQ 児童用の結果

SDQ 各尺度の平均値と標準偏差を表2に示す。結果として、得点平均値の5月(プレ)11月(ポスト)比較を行ったところ、多動不注意-0.6、情緒-1.5、仲間-0.45、TDS-2.5ポイントの得点平均値の低下、向社会性+0.45ポイントの得点平均値が増加した。各尺度におけるプレ・ポストの差を検討したところ、行為尺度、仲間尺度、向社会性で有意な差は認められず(行為尺度、 $t=-0.2$ ,  $df=19$ ,  $p=0.84$ ; 仲間尺度、 $t=1.16$ ,  $df=19$ ,  $p=0.25$ ; 向社会性尺度、 $t=-1.2$ ,  $df=19$ ,  $p=0.24$ )、多動不注意尺度、情緒、TDSでは有意な差が認められた。(多動不注意尺度、 $t=2.25$ ,  $df=19$ ,  $p=0.03$ ; 情緒尺度、 $t=4.8$ ,  $df=19$ ,  $p<0.001$ ; TDS、 $t=4.07$ ,  $df=19$ ,  $p<0.001$ )

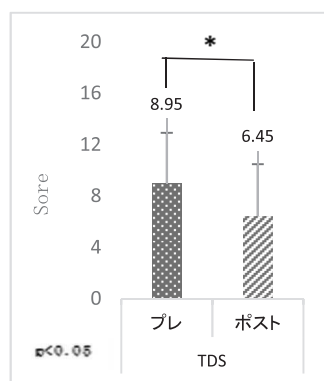
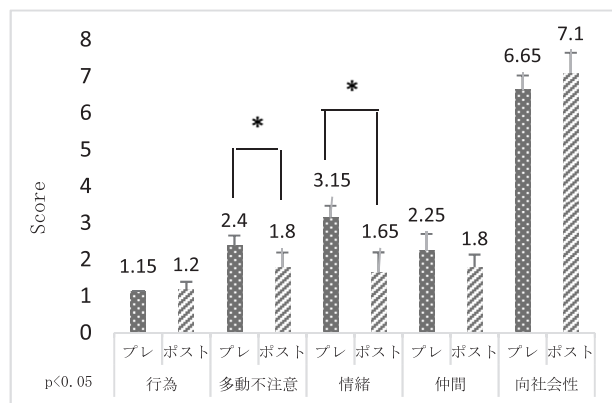


図15 学年SDQ(児童)得点平均値と標準偏差のプレ・ポスト比較 N=20



### 3. 4 Q-Uの結果

学級集団のプロット図の位置は、Q-U の介入前評価(6月)、介入後評価(11月)を比較検討したところ、6月よりも11月は全体的に改善傾向が見られた。学級生活満足群は15人から17人へと増加し、割合も全国平均を上回る85%と高い値となった。非承認群は3人から1人へと減少し、割合も全国平均18%に対して5%と低い値となった。侵害行為認知群は0人と維持していた。しかし、学級生活不満足群は介入前と介入後と人数の変化はなく、2人であった。個別に見ると、該当する2名のうち、1名対象児童が学級生活満足群に変化していたが、学級生活満足群から不満足群に変化している児童が1名であった。

### 3. 5 外国語聞き取りテストの結果

介入前(5月)と介入後(11月)の比較は、市販テストの問題の内容や質が違ふこともあり、検討することが難しいと判断したため、Unit1 から Unit5 までの観点別評価規準に基づく平均値で比較した。問題には、Unit4 からはアルファベットの単語を聞き取り、大文字や小文字で書くことができるという問題があった。聞き取ったアルファベットで書く問題は、知識・技能である。知識・技能の平均値は90.4%、思考・判断・表現の平均値は、76.4%であった。

### 3. 6 外国語意識調査の結果

表2の意識調査を20XX年5月と20XX年10月に実施した。

表2 外国語意識調査(児童版)質問項目

英語の授業・英語の勉強について	1	英語(外国語活動)の授業は、楽しい。
	2	英語(外国語活動)の授業に進んで参加している。
	3	英語(外国語活動)の授業の内容を理解していると思う。
	4	授業の中で、英語で歌を歌ったりチャンツを言ったりすることが楽しい。
	5	英語でゲームをすることが楽しい。
	6	英語で友だちや先生と会話することが楽しい。
	7	外国のことについて学ぶことが楽しい。
	8	英語で自分のことや意見を発表することが楽しい。
	9	聞いたり話したりしたことを、読んだり書いたりすることが楽しい。(5・6年生のみ)
英語について	10	英語が好きだ。
	11	英語は大切だと思う。
	12	英語を使って、外国の人と話してみたいと思う。
	13	英語を使う仕事をしてみたいと思う。
	14	海外旅行へ行ってみたいと思う。
	15	英語を使って、日本の文化を紹介してみたいと思う。

介入前評価(プレ)と介入後評価(ポスト)と比較したところ、総合的に見ると肯定的評価が高くなった。項目1と2は75%から95%、項目3は95%から100%、項目11は95%から100%となった。一方、課題が見られた項目9は70%から65%、項目14は60%から55%と、肯定的評価がやや低くなった。

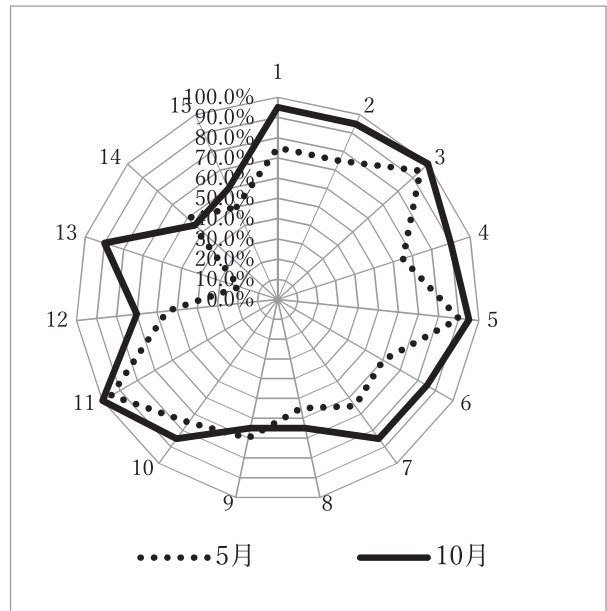


図2 外国語意識調査の結果

## 4. 考察

本研究では、高知県の5つの柱を意識した授業のユニバーサルデザインに焦点をあて、外国語における友だちと関わり、コミュニケーションの楽しさを体験する外国語の授業づくりの実践研究を行った。ユニバーサルデザインによる外国語科の授業づくりを通して、全ての児童の参加と理解を促し、主体的にコミュニケーションの活動を行うことができるために、介入前評価(5月)の授業中に見られた実態と各種アンケート調査により見られた実態を考慮した手立てを考案し、介入期(9月～11月)の授業実践を行った。以下に実践の柱に従って考察を記す。

まず、第一に実態把握では学力の高低差も顕著には見られておらず、落ち着いて学習に取り組むことができるものの多動不注意については、3名がHigh needsに属していた。授業中立ち歩くことはないが、姿勢が崩れがちで、指示が聞き取れないこともあった。とくに年度当初の課題としては、人前で発表することや反応を示すこと、自分から友達と関わりにくく、言語活動を行う際には配慮を必要とする児童がいた。そのため、クラス全体としてのつながりの弱さが見られた。

外国語に対する理解や意欲も肯定的評価ではあるが、

英語を使って伝える自己表現活動に自信のなさや、苦手意識をもっていた。他教科においても、相手を意識した伝え方に課題があった。

以上から自分から友だちと関わりにくく、外国語活動等の言語活動を伴う活動となると配慮を必要とする児童がいたことを研究の主題とし、教材・教具の工夫において、友だちと関わる必然性を持たせたワークシートを作成した。関わる必然性を仕組むことで、自分から友だちと関わるのが苦手な児童も英語を使ってやり取りする相手を求めて関わる行動が増えた。これは、Q-U における 1 回目より 2 回目の学級生活満足群に属する児童が 10%増加したことから示唆される。また、SDQ に見られた多動不注意、情緒、向社会的性のポスト評価において、Low needs の割合が増加したことによっても示されていると考える。よって、友だち同士のつながりを強化していくことが必然的に仲間意識の向上へとつながることが示唆されたと考察した。柘植は、授業のユニバーサルデザインを展開していくうえで重要なことは、学校経営や学級経営との関係においても重要であると捉え、障害のある子とない子が共にお互いを認め合い支え合う学級、安心して安全な学級、差別的な言葉遣いがない学級をつくること、授業のユニバーサルデザインを展開していくベースとして重要であると指摘している<sup>8</sup>。学級内で友だちとつながることができれば、より言語活動の質が向上し、コミュニケーション活動が活発に行われることであろう。

第二に、活動内容の工夫による、ペア・グループ学習に変化をもたせたことである。具体的には、何分間で何人と関わるという見通しを提示した活動を仕組んだことである。そうなれば、必然的に相手と関わりをもたせることになるため、相手を求めてやり取りが行われるのである。次に、常に相手意識をもたせた単元ゴールを設定したことである。Unit4 では、「(自分の良さに気付くために)友だちの良いところ紹介カードを作ろう」、Unit5 では、「自分達の町を見つめるとともに、外国人観光客に英語を使って道案内ができるようになるために、宝探しをしよう」、Unit6 では、「ALT の家族に自分達の町のふるさとメニューを紹介するために、ふるさとメニューをつくらう」とし、そのゴールに向かう中で、やり取りが行われたり、相手に向けた発表となったりする場を設定した。外国語意識調査の結果から、「英語で友だちや先生と会話することが楽しい」が 60%から 85%と向上したことから、目的や状況、場面設定が学習への参加を促したと捉えることができる。このことから、相手意識をもたせた単元ゴールの設定が、言語活動への充実につながっ

ていくであろう。さらに、Small Talk において、授業者対 ALT, JTE だけではなく児童も巻き込み、全員で参加できる授業を意識した。具体的なやりとりの場面を設定し、興味関心をもたせた場面設定を行ったのである。その場面設定の際には、単元ゴールに向けてどのような英語表現が使えないといけないのかは常を意識させ、児童に身近にある状況をもとに、もっとやりたい、英語を話したいと思わせることが重要であったと考察した。

先行研究においても、近年、UDL を活用した授業づくりが行われていることが指摘されている。佐藤・納富は、通常学級に在籍する特別な教育的ニーズのある児童への学習支援の工夫を整理した結果、他の児童への興味・関心も引き起こし、主体的に英語を聞く、使えるようになりたいという肯定的な回答をする児童が、学級の約 90% になったことを明らかにした<sup>9</sup>。このことから、学びは一人ひとり違うことを前提に、学習者への支援方法を一つの教材だけではなく、多様な学びの保障をしていくことが重要であると考ええる。外国語意識調査(11 月)の結果から、外国語の授業に進んで参加している割合は 95%と高くなったことが示されたが、英語を使って外国の人と話してみたい、日本の文化を紹介してみたいと思う割合は約 65%であった。この結果を踏まえ、今後は、さらに多様な学びを保障していく教材の工夫、活動内容の工夫をしていくことが、児童の英語をもっと具体的な場面で使ってみたいという意欲向上につながっていくと推察する。

第三に、情報伝達の工夫による具体な場面状況において、視覚的な提示をしたことである。外国語意識調査(11 月)の結果において、「英語の授業の内容を理解していると思う」と肯定的な回答をした児童の割合は、100%となった。教材教具の工夫や活動内容の工夫において、全員参加型の授業を追求したことから、内容理解の面につながったと考えられる。児童が外国語を使ってみたい、使えると思うためには、より理解できる教材の工夫や、視覚的な提示によってすべての児童が「できる」「分かる」を実感することが重要であろう。

本研究では、高知県における授業のユニバーサルデザインを念頭に、外国語における言語活動の充実を目指した実践を行った。

今後は学校全体でのユニバーサルデザインの展開及び多様な学びを保障した教材や活動内容の工夫が必要になろう。

そして外国語のみならず他教科においてもユニバーサルデザインの方法が活用されることが肝要であろう。

またすべての教科において学級経営が基盤となることから、教科の特性を踏まえた教材研究と学級経営の両

方の視点から授業改善をしていくことが求められるであろう。

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編においては<sup>10</sup>、外国語による、コミュニケーションにおける見方・考え方とは、物事を捉える視点や考え方であり、外国語やその背景にある文化を、他者との関わりに注目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築することが指摘されている。

よって今後は、目的や場面、状況に応じた授業づくりを常に意識して実践をしていくとともに、学級経営や他

教科との関わりも重視した授業改善が求められる。

それが中学校への接続においても大きく関わってくる。小学校段階からの学習者の参加と理解を保障することを常に考慮しつつ、今後の継続的な授業改善に取り組んでいく必要がある。

## 5. 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP18K02793 の助成を受けたものである。ご協力いただいた教職員の皆様、支援員、そして何よりも学級の児童に心より感謝申し上げる。

## 註・引用文献

<sup>1</sup> 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 総則編』。

<sup>2</sup> 同上,文部科学省(2017)

<sup>3</sup> 高知県教育委員会(2013)『すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～実践事例集～』。

.高知県教育委員会(2011)『すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～』。

<sup>4</sup> 直山木綿子(2020)全員参加の外国語授業 第 1 回：どの子どもも参加する外国語活動・外国語の授業づくりをめざして-「言語活動を通して」指導する-『授業 UD 研究』第 9 号,pp.52-55,日本授業 UD 学会。

<sup>5</sup> 齊藤一弥,高知県教育委員会(2019)『新教育課程を活かす能力ベースの授業づくり』ぎょうせい。

<sup>6</sup> Strengths and Difficulties Questionnaire の略称。「子どもの強さと困難さアンケート」と訳される。2 歳から 4 歳を対象とした保護者質問紙, 4 歳から 10 歳を対象とした保護者・教員質問紙, 11 歳から 17 歳を対象とした保護者・教員・本人質問紙, 18 歳以上を対象とした

本人質問紙から構成される, 行為, 多動と不注意, 情緒, 仲間関係の 4 つの困難さと, 向社会性の 1 つの強さの 5 つのサブスケールに当てはめられた 25 の質問項目がある。領域それぞれについての支援の必要性が「ほとんどない (Low Need)」「ややある (Some Need)」「おおいにある (High Need)」のどのレベルであるか示す。イギリスの児童精神科 Robert N. Goodman によって開発され, ヨーロッパ諸国で広く用いられており, 2018 年 10 月現在, 日本語を含めて 87 の言語に翻訳されている。

<sup>7</sup> 村上加代子編・著(2019)『みんなにわかりやすい小・中学校の授業づくり 目指せ! 英語のユニバーサルデザイン授業』学研教育未来。

<sup>8</sup> 柘植雅義(2011)通常学級における授業のユニバーサルデザインーその有効性と限界を巡ってー,保存版 通常学級の授業のユニバーサルデザイン『特別支援教育研究』No.652, 東洋館出版社。

<sup>9</sup> 佐藤・納富(2018)外国語活動における主体的に学ぶ児童を育成するための学習支援ー学びのユニバーサルデザイン(UDL)を活用した授業づくりを通してー,『福岡教育大学紀要』,第 67 号,第 4 分冊,pp.221-229。

<sup>10</sup> 文部科学省(2019)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語活動・外国語編』。

